

タイトル	子ども，大学生，実務者の交流を通じたまちづくり人材育成を目指す取組み：まちの宝探しワークショップ実践事例報告
著者	岡本，浩一；大場，眞一；森，哲子；能戸，裕之；瀧田，展明；Okamoto, Koichi；Oba, Shinnichi；Mori, Testuko；Noto, Hiroyuki；Takit, Nobuaki
引用	工学研究：北海学園大学大学院工学研究科紀要(12)：37-45
発行日	2012-09-28

活動報告

子ども，大学生，実務者の交流を通じた まちづくり人材育成を目指す取組み —— まちの宝探しワークショップ実践事例報告 ——

岡 本 浩 一*・大 場 眞 一**・森 哲 子***
能 戸 裕 之****・瀧 田 展 明*****

The action of the MACHIDUKURI personnel training through the communication
with children, university students and the practitioners
Report of the example of towns' treasure hunt workshop

Koichi Okamoto*, Shinnichi Oba**, Testuko Mori***, Hiroyuki Noto**** and Nobuaki Takita*****

1. 活動の背景

人口減少と経済の低迷から，自治体財政は厳しい。自治体と連携して地域住民が自らの手により展開するまちづくり活動が増えている。高齢者が豊かに暮らせる社会の実現だけでなく，将来のまちを支える子どもたちに，地元のまちや地域の景観に対する興味・関心を育む活動も広がりを見せている。

NPO 団体や住民組織，設計事務所，お寺，大学など民間主体で，地域の子どもたちとまちの将来像を考える活動が各地で展開している。行政が先導する活動には，地域住民や子どもたちと実践する青森県の「まち育て活動」が特徴的な活動^{※1}として注目できる。ほか兵庫県，札幌市，千葉市，川崎市など多くの自治体で，子どもを向けのまちづくり副読本^{※2}が作られ，地域で働く大人たちと触れあうことができる職業体験イベントも各地で開催されている。また国土交通省は「景観まちづくり学習」を推進^{※3}し，北海道も景観学習プログラム^{※4}を有する。札幌市主体の子ども向け都市景観・都

市計画普及啓発活動は，平成 24 年度都市景観大賞（景観教育・普及啓発部門）優秀賞を受賞した。

研究の蓄積をみると，子どもを交えて地域の防犯を考える研究，児童館や公園を核として地域住民との触れあいの場を生む研究，体験的に地域を学ぶ「こどものまち」の取組みに関する研究などが豊富に見られる。

一方で，これらの活動や研究は，5 年程の積み重ねがほとんどであり，発展の余地は大きい。例えば，こどもたちを豊かに育む環境づくりに向けて活動し，地域全体で子どもと関わる大切さを指摘することも環境学会も，2004 年の設立でその取組みは 10 年に満たない。

学校の活動は，学校が取組みを選択・実施しなければ，まちを考えるきっかけは生まれにくい。職業体験は，普段の生活を支える地域との関係が希薄となる。また，いずれの活動も発信源が身近な地元地域には無い。住みよいまち，住み続けたいまちの実現には，行政や学校が取組みに過度に依存せず，地域主体で子どもと関わりまちを考えるための利用しやすい仕組みが必要である。

* 北海学園大学大学院工学研究科建設工学専攻（建築系）

Graduate School of Engineering (Architecture and Building Eng.), Hokkai-Gakuen University

** (株)シグマ都市コンサルタント

Sigma Town Consultants

*** (株)クオリアット

Qualiat

**** (有)ジョブコム

Jobcom

***** (株)ソフトスケープ

Softscape

以上から、地域の一員としての実務者と大学生が関わり、子どもたちにまちに対する意識付けや興味関心を生むプログラムを実践した。

2. 本稿の位置づけ

本稿は、北海道まちづくり協議会（以下 北まち協）内のコミュニティ再生研究グループ（以下 再生G）が、子どもたちと考えるまちづくりの重要性に着目し2011年に始めた活動に関する報告である^{#5}。筆者の研究室はこの活動について、1. 大学生のまちづくり活動経験の機会、2. 実務者（大人）と小学生とを橋渡しを担う大学生の可能性、3. 実務者と大学生との交流の機会、という3つの意義を見出し参加した。

北まち協は、まちづくりに関わる様々な民間企業や個人が集う任意団体である。『“北海道の暮らしたいまち——オンリーワンづくり”を行動のミッションとして掲げ、[社会のニーズ]を把握し[大事な思い]そして[自らが手にする資源]を相互に活かしかう機会や研究の場を通して、ミッションの達成に向けた提案活動、協働活動を展開していきます』^{#6}とのコンセプトで、商店街を通じたまちの再生、マンション建替え支援、防災減災まちづくり活動などを実践している。

3. 活動概要

1) 活動の目的

再生Gの大きなテーマは、地域コミュニティの再生である。その端緒として、子どもたちが自分のまちを考えるきっかけを生む活動を実践する。

これを通じて子どもたちのなかに、地域に住まうことへの愛着や誇り、マナー意識、まちづくりへの関心を醸成し、まちづくり人材の育成、ひいては地域コミュニティの形成にも寄与することが目的である。

さらに、子どもたちの視点からみたまちのありようには、地域の環境形成や固有の資源を未来へ引継ぐ方策の糸口があると考えられる。加えて、地域、実務者、大学が協働する素地を整えるとともに、まちづくり活動に関わる分野・業種への大学生の進路選択が期待できる。

このような考えから、再生Gの最終目的は、地域が一体となり進めることができるまちづくりの

手段と方法を見出すことでもある。

2) 活動のメンバー

再生Gのメンバーは、北まち協会員の有志6名である。サポートメンバーとして同会員1名と、北海学園大学工学部建築学科4年生（2011年度当時）の12名が参画した。主要6名の内訳は、都市計画コンサルタントが2名、コミュニケーションデザイナーと再開発技術者とが各1名、学識経験者2名となっている。

3) 活動の日程

ワークショップ（以下WS）実施前に、再生G内で活動の方向性や内容に関する打合せを3回、協力小学校に実施の段取りや留意事項確認などのため訪問を3回、小学校区域内のまちづくりセンターに趣旨説明の訪問を1回おこなった（表1）。

WS終了後、成果のまとめと今後の展開に関する打合せを2回、御礼と報告のために協力小学校への訪問を1回おこなった。

4. 活動の構成

活動は、次の4段階で構成している。

1. 検討準備段階
2. 事前踏査
3. WSの実施
4. まとめと今後に向けた議論

各段階の取組み内容について以下に概説する。

1) 検討準備段階

最初に、子どもたちが何気なく通学したり遊んだりしている場を対象に、改めて地域を見つめ直すきっかけづくりの必要性をメンバーで確認した。これを踏まえ、子どもと一緒に取組むWSのテーマ設定を議論した。WSを進めるための具体的な切口として、「きれいな、うつくしい、すばらしい（すごい）」をキーワードに設定し、まち歩きを実施する方向性をかためた。

活動の主目的に加えて、まちづくり人材の育成も目的である。この目的に向けサブテーマを設定した。対象はサポートメンバーの大学生である。WSを支援する経験を通じ、まちづくりへの関心

表1 活動日程と各概要

日付と曜日	項目	概要
2011年 6月17日 (金)	第1回 グループ 会議	出席：6名 (含サポートメンバー1名) ・活動の目的と内容の確認
6月29日 (水)	協力 小学校 訪問(1)	訪問：2名 先方対応：校長 ・WS開催協力依頼
7月4日 (月)	第2回 グループ 会議	出席：6名 (含サポートメンバー1名) ・学校との打合せ結果報告 ・地域との関わり方 ・WSの進め方
7月5日(火) ～12日(火)	準備作業	・募集チラシの原案作成
7月13日 (水)	協力 小学校 訪問(2)	訪問：2名 先方対応：校長、教頭 ・募集チラシ確認 ・翌日必要枚数を学校へ持込
	まちづくり センター 訪問	訪問：2名 先方対応：所長
7月15日 (金)	協力 小学校 周辺現地 調査	会場：協力小学校及び周辺 出席：4名 北海道学園大学生6名
7月22日 (金)	協力 小学校 訪問(3)	訪問：2名 先方対応：教頭 ・参加申込者確認
7月26日 (火)	第3回 グループ 会議	出席：5名 北海道学園大学生3名 ・WS開催の段取り
7月27日(水) ～8月7日 (日)	準備作業	・WS備品購入 ・会場チェック
8月8日(月) ～10日(水)	WS開催 (3日間)	会場：協力小学校及び周辺 出席：5名 北海道学園大学生：12名 教頭 まちづくりセンター長 同上職員 参加：協力小学校4年生3名
8月31日 (水)	協力 小学校 訪問(4)	訪問：2名 先方対応：校長 ・活動協力のお礼
10月7日 (金)	第4回 グループ 会議	出席：4名 ・今後の活動内容についての 確認
11月1日 (火)	第5回 グループ 会議	出席：5名 ・報告書作成について

や参加意識を持つきっかけとなるよう意識した。事前踏査と打合せに出席して意見を出してもらい、WS当日は「お兄さん・お姉さん」の立場で小学生の発見やまとめをサポートする役割を担ってもらった。活動プロセスの全体にわたり経験できる仕立てとした。

一方、WSを体験してもらう小学校の具体的な選定に苦慮した。小学校では、既に様々な活動が行われているだけでなく、小学生自身も習い事などで過密なスケジュールを抱えている。この活動は初回であり実績がなく、取組み内容に理解が得

られても、新たに参加や協力を頂戴できる段階には至っていない。そこで今回は、サポートメンバーに加わっていた会員にお願いし、学生時代同期の方が校長先生として勤めている小学校に協力を打診した。後日、協力について承諾いただいた旨が報告され、併せて次の5点が校長先生からの留意事項として伝えられた。

1. 市のまちづくり施策の尊重
2. 父母への適切な実施案内
3. 実施時の安全性への配慮
4. 地域の歴史性を踏まえたWS内容
5. 小学校教諭の不参加

2) 事前踏査

WSの協力を得られた小学校周辺には、約3haの地区公園があり、明治22年から続く神社が鎮座している。これらは地域の歴史性と豊かな緑環境を支えている。小学校正面には交通量の多い4車線道路があり、沿道には商業施設や金融機関が立ち並ぶ。さらにその周りには、主に戸建住宅が建ち並んでいる。

まち歩きWSを、安全で円滑かつ実り豊かにするため、WS実施メンバーで対象地域の事前踏査を実施した。安全性のチェック、地域の歴史・文化、町並み景観、公園緑環境の様子、子どもたちが興味を持ちそうなポイントなどを確かめ、WS当日に歩く範囲およびルートを確定した。

3) WSの実施

WSは、夏休み期間中の3日間(8月8、9、10日)に連続して実施した。習い事、学習塾などで子どもたちなりに忙しい様子で、申込みは6名、実際に参加したのは3名となった。

WSで共通の目的を持つことで、主役である子どもたちと大学生や大人たちとの間に、段階的に繋がりが生まれることを想定した(図1)。体を動かしてともに経験する「まち歩き」を通じたコミュニケーションから始まり、撮影した写真を通して互いの視点を共有・共鳴し、マップの制作で互いの信頼と共感を持つという段階である。コーディネーターは、この段階性を意識して進行に取り組んだ(表2)。申込み人数と参加人数の相違は、今後発生する可能性が高いと考えられ、現場での柔軟な対応が欠かせないことが明らかとなった。

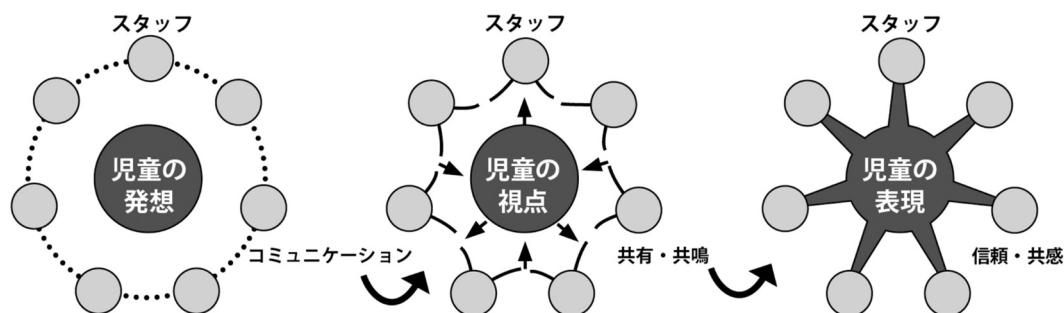


図1 WSを通じて想定した繋がり の段階性

表2 WS 3日間それぞれの取組み内容

日	項目	内 容
一 日 目 (8月8日)	取組み	オリエンテーション～まち歩き
	サブ テーマ	児童とスタッフのコミュニケーション
	段取り 構成	1. オリエンテーション 《ワークショップはどうやってやるの?》 2. グループ編成（4～5人編成・隊長は児童） 《まちの宝を見つけに行く準備をしよう!》 3. グループ毎にまちの宝探しテーマを設定 《見なれたまちの宝再発見の心構えを持とう!》 4. まち歩き 全員で同じ道順を歩き、グループテーマに沿った風景や街並みのポイントを児童（隊長）が撮影
	フィード バック	学校に戻り、日頃見なれたまちで宝探しをしたことに関する感想を聞き、翌日の作業のイメージを持てるよう対話時間を設けた
二 日 目 (8月9日)	取組み	思考の整理とその表現
	サブ テーマ	児童とスタッフの意識共有と共鳴
	段取り 構成	1. 自分が撮った写真の中から、下記条件を前提に宝マップに使う写真を選び出し 《写真選択の条件》 ・設定テーマあるいは自分の思いが伝わる ・今回発見し、ほかの人に知ってほしいまちの宝 ・残したいまちの風景や街並み、暮らしの様子 2. 写真、イラスト、説明文を組合わせて「まちの宝マップづくり」作業開始
	フィード バック	翌日のマップ仕上げに向けて、まとめのイメージを持っているか、課題やグループメンバーの力を借りたい事柄などを意見交換する時間を設けた
三 日 目 (8月10日)	取組み	表現の整理と仕上げ、発表講評会
	サブ テーマ	児童とスタッフの信頼と共感
	段取り 構成	マップの仕上げ作業 各グループとも、参加児童（隊長）の方針のもと時間内に仕上げることを目標にメンバーが協力して作業をおこない、すべてのグループが達成した
	発表と 講評	参加児童（隊長）が自分の「まちの宝マップ」について、マップのテーマ、発見できたこと、感想などを発表した 各マップにその意図や活動を讃えるオリジナル賞名をつけて講評とした

4) まとめと今後に向けた議論

今回のWSは、再生Gの初めての取組みである。多くの発見や改善点、今後の展開へのヒントを得ることができた。WS終了後、得られた発見、反省点、今後の展開などについて議論した。

議論の結果を踏まえ、活動の準備段階から実施までにおける指摘事項や関わった人物の感想なども集約し報告書としてまとめた。

この報告書は、活動のまとめであると同時に、今後の活動実践を進めるため協力をお願いする際の説明資料としての役割も担う。

5. WS 各日の実施手順詳細と成果

ここでは、開催日それぞれの取組み内容と状況およびその成果について整理する。

1) WS 1日目について

(1) オリエンテーション

はじめに、WSの目的や方法について、事前踏査で集めた写真なども掲載したパワーポイントで説明した。説明の際は、参加者全員で床に車座となつて、合間に質問や内容確認の時間を適宜とりながら、子どもたちとの対話を通して、参加者全員の距離感を埋めるよう配慮した。事前踏査の結果を踏まえ、「きれい、うつくしい、すばらしい(すごい)」のキーワードに基づくまちの宝探しに取組みやすくするため、「歴史の宝」「自然の宝」「宝となる風景」「宝となる暮らし」「自分の宝」という5つのテーマを提示した。

(2) グループ編成

当初は、5つ用意したテーマから同じテーマを選んだ子どもを集めて1グループとし、そのなか



写真1 オリエンテーション



写真2 まち歩きの様子（Aグループ）



写真3 まち歩きの様子（Bグループ）



写真4 まち歩きの様子（Cグループ）

で役割分担する予定であった。しかし、参加人数が3名と少なかったため1人1グループとした。

子どもには、グループリーダー（以下 隊長）となってもらい、興味を持ったこと、グループメンバー（＝大学生、以下 隊員）に見せたいところなどを積極的に発見し写真撮影するよう促した。各グループの隊員はおおむね3～4人とし、隊長の作業を補佐する役割を担った。一方、再生Gのメンバーは、安全確認や進行状況を調整するスタッフとして各隊に1名ずつ同行し、さらに1名が全体の状況を写真に記録した。

(3) テーマ選択

少人数のため、選択するテーマの数や種類に制限を設けず、他のグループと重複してよいこととした。

Aグループの隊長は「自然の宝」と「宝となる暮らし」、Bグループの隊長は「歴史の宝」と「宝となる暮らし」、Cグループの隊長は「自然の宝」を、それぞれテーマに選んだ。

(4) まち歩き

隊長は、まちの宝を探しながら主に写真を撮影した。隊員は、撮影場所を地図上にプロットし、スタッフはルート誘導と安全確保につとめた（写真1～4^{※7）}。隊長ごとに興味関心を抱く場所やものが違うため、全グループで同じルートを通るこ

ととした。適宜、スタッフ間で連絡を取り合い全体の工程を管理した。WS当日は連日からの猛暑が続いていたため、スタッフが保冷ボックスを携行し、随時水分補給や木陰での休憩時間を取って熱中症対策に配慮した。

(5) WS 1 日目の成果

子どもを隊長、大学生を隊員、会員をスタッフとして「隊」という一体感のもとにまち歩きをしたことで、子どもたちの緊張感がほぐれた様子が見られた。WSへの興味が生まれ、多世代間での信頼関係構築にもつながったと考えられる。

隊長らは、楽しみながら精力的に写真撮影をおこない、大人ではとらえることが難しい新たな観点による「まちの宝もの」を多数収集した。猛暑のなか、長時間のまち歩きには必ずしも適さない状況だったが、事故や怪我もなく予定の内容を完遂できた。

2) WS 2 日目について

(1) 撮影した写真の選別を通した前日の振り返り

まちの宝探して撮影した写真は、1日目のうちに全て現像し、サムネイル一覧とともに持込んだ。隊長らは、自分の撮影した全ての写真のなかから条件（表2、二日目参照）に合うものを選別した。隊員は隊長によって選別された写真を、おおまか



写真5 マップ制作の説明



写真6 マップ制作の様子（Aグループ）



写真7 マップ制作の様子（Bグループ）



写真8 マップ制作の様子（Cグループ）

に仲間分けし、隊長がまとめの最終形をイメージできるように適宜ヒントを示しながら対話を通じて作業を進めた。

(2) まちの宝マップ制作

おおまかに仲間分けした写真は、模造紙の上に撮影場所別、テーマ別などで整理し、全体の構成が想像できた時点でマップ制作を始めた（写真5～8^{※8}）。隊長には、写真を選んだ理由や撮影対象のよい点などを付箋紙に書いてもらい、写真と組合わせてマップの構成素材とした。順調に整理が進んだが、写真の枚数が多かったり、盛り込みたい要素や伝えたいことに適した表現方法の確定に時間を要したりしたため、完成は3日目に持越しとなった。

(3) WS2日目の成果

隊長らは、自分で撮影した写真をよく見直す作業を通じて、風景やものの切り取り方、写し方の違いを発見していた。多様な表現方法や、まち歩きで発見した宝、それらを記録する面白さに気づいた様子が見られた。2日目の作業は、大半が写真整理となり、マップの完成には至らなかった。

隊長らの取組み姿勢から、撮影した対象や情景にこだわりを持っていることを発見できた。隊長らそれぞれの個性と価値観を尊重し、対話を通じて向き合うことの大切さを確認できた。

隊長らには、選別したそれぞれの写真について、撮影した動機や伝えたい意味、考えを明確に言葉に表すことは難しい様子があった。スタッフは、円滑に作業を進めるためのアドバイスや時間配分などに工夫を要した。

3) WS3日目について

(1) まちの宝マップの仕上げ

マップの完成を前日から持越しのため、制作を継続してイラストや彩色などを施しながら仕上げた。それぞれの隊長には、マップの内容が自分の考えを伝えられる適切な成果品となっているか、発表の前に確認してもらった。

(2) 発表と講評

まちの宝マップを貼りだし各隊長が発表した。続く講評では、コーディネーターからABCの各隊長に「情報満載で賞」、「スゴ録で賞」、「女の子らしいで賞」が与えられた。発表・講評後、小学生、大学生、スタッフの協働でWSを終えた証として、全員で記念撮影をおこなった。

最後に、今回の経験を今後も活用できるように、お宝マップの作成方法をまとめた資料を、隊長らに手渡して閉会した。

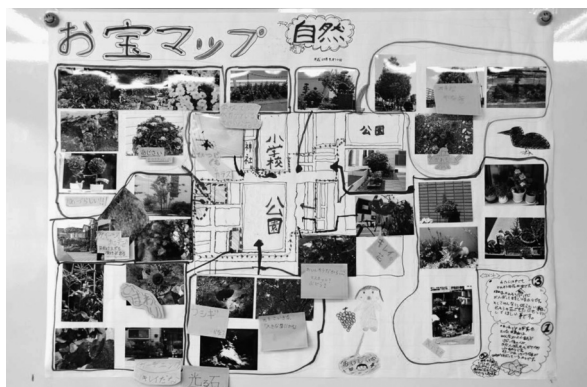


写真9 Aグループのまちの宝マップ

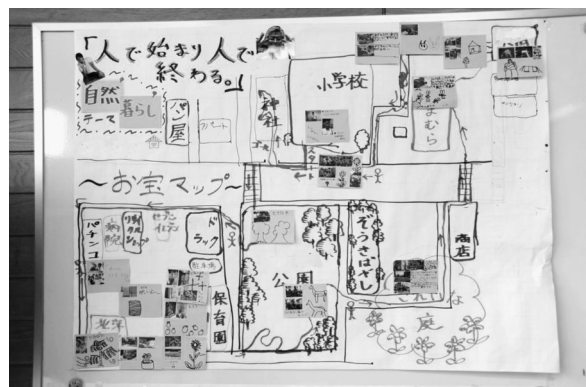


写真10 Bグループのまちの宝マップ



写真11 Bグループの追加写真資料



写真12 Cグループのまちの宝マップ

(3) 3日目の成果

まちの宝マップは、三者三様のまとめとなり隊長らの個性が溢れる豊かな成果品となった（写真9～12^{註9）}。隊長らの柔軟な発想と、隊員やスタッフのアドバイスとが調和し、自由な表現のなかに意思やこだわり、テーマ性を含んだものとなった。Aグループの隊長は、まちの彩りや豊かさを支えるガーデニングの花々に注目して身近な「自然」と題してまとめた。Bグループの隊長は、隊員やスタッフとのまち歩きの楽しさを交えて「人で始まり人で終わる」と題してまとめた。Cグループの隊長は、地域の歴史的な場所に着目し「ぼくが歩いた歴史マップ」と題してまとめた。

マップは、再生Gの資料として記録に残す目的で一旦持ち帰ったが、後日、夏休みの自由研究として利用してもらうように小学校を通じて各隊長に返却した。参加者が少なく、子どもたちからWSの感想や評価を定量的に把握することはできなかった点は、今後に向け考慮すべき事項である。

6. 活動関係者の認識と評価

協力小学校の校長先生からは、「参加人数が少なかったことは少々残念だったが、参加した子どもたちはよい経験をした。」と、活動について一定の評価をいただいた。

1) 活動メンバーの認識

「成果品を通じて子どもたちがまちを見つめ直すきっかけになったことがわかる」、「児童を隊長とした共同作業では、大人が子どもの目線を尊重し、子どもが大人に何がやりたいのかを分かりやすく伝えるといった、コミュニケーションの成立する場面が多く見られた」、「複数の世代が集う活動の有意義さをつよく感じた」という評価があった。これらから、まちを見なおすきっかけづくり、コミュニケーションの大切さ、多世代間交流の実現という活動の目的が、ある程度達成されたと考えていることがわかる。

一方、「大学生の協力でよいWSになったが、時間の制約から子どもの感じたこと、思ったことの

確認が十分にできなかった」，「子どもたちの視点を今後の地域コミュニティ形成に反映する方法を議論・試行する必要がある」などの評価があった。実施時間と内容の改善・充実，今後の展開についての指摘がなされた。

2) サポートメンバーの大学生の認識

「小学生がどんな視点でまちを見ているのかが解り興味深かった」，「まちのなかに大人の目線では見えない発見があった」，「整備された街並み，住宅街もよいが，逆に子供の好奇心や冒険心をそそる部分も大切だ」と，子ども目線の新鮮さが指摘された。加えて，「小学生でも，大学生でもどのような立場でも共有できることがあると感じた」，「すごく楽しそうにしていたので，自分も自然と笑顔になっていた。楽しくできてよかった」と，心の交流を感じた様子も見られる。

また，「子どもだったときにWSに出会っていたら自分のまちについてもう少し考えていたかもしれない」と，子どものうちに経験する大切さが認識されていた。

7. まとめと今後の課題

1) まとめ

活動の成果は次の5つにまとめられる。

1. 子どもたちが普段過ごしている身近なまちを見直すきっかけづくりができた
2. 子どもたちの視点・こだわりを発見できた
3. 大人には見つけにくいまちの魅力・宝ものを発見できた
4. 大学生のまちづくり経験となりまちづくりに対する興味関心が高まった
5. 世代を越えて目標や時間を共有することの大切さを再認識できた

2) 今後の課題

本活動を通じて，地域の子どもたちを主役としながら，大学生と実務者が協力し，まちの姿を考える仕組みを整理することが求められる。

学校の授業という枠に限らず，地域の多世代がまちの存在を意識して互いに関わり合うプロセスの意義は大きい。しかしながら今回の取り組みには，

地元住民と関わる場面の設定を含めるに至らなかった。小学生，大学生，実務者に加えて，地域住民や父母らとの協力についても検討していくことが必要と考える。

活動内容の充実を図りながら，発見・蓄積していくノウハウや成果のまとめを，小冊子やフローチャートなどのわかりやすいかたちにまとめ公表することが重要である。これらは，地域として具体的な取組みに展開する足がかりになると考えられる。実施に関わる要点や考え方や仕組みをわかりやすくまとめて伝えることで，地域独自にまちを見つめ直し，地域住民自らで行動を起こすきっかけが生まれる可能性を高められると考える。

そのための課題として，次の4つを整理する。

(1) 手法の検証と確立

- ・一般的なWSのほか，子どもたちが興味を持って取組める手法やカリキュラムを構築する
- ・アンケートなどを通じ，子どもの感想や意見や実感を丁寧に拾い上げてフィードバックする
- ・〈アイディア→実践→検証〉を5年程度のスタンスで取組み，方法の吟味とノウハウの蓄積を進める

(2) 事前の準備と調整

- ・学校をはじめ教育委員会や担当部局，地域のまちづくりを支える組織等から協力を得るため，今回の実績を伝えて活動に対する理解を深めるPRと事前調整が重要である
- ・一人でも多くの子どもが参加できるよう開催時期の再考が求められる
- ・子どもたちが興味を持つカリキュラム構成，保護者の理解を深めることが必要である

(3) 世代や対象地域の拡充

- ・小中高校生との取組みを検討し，自分の住むまちへの視点や関心の芽生えに繋げ，まちづくりの担い手育成の契機を年代を広げて創出する
- ・札幌に限らず地域特性からテーマも多様になる道内各地の他市町村での展開も検討する
- ・大学生は，子どもとおとなを繋ぐ世代と考えられることから，継続的に大学生の参加を募る

(4) 成果の活用

- ・実践の成果はノウハウを抽出して，整理された表現で事例集などにまとめる

・楽しい学びに繋がるゲーム的な要素の導入なども検討する

注1：参考文献1)

注2：参考文献2)～7)

注3：参考文献8)～10)

注4：参考文献11) 12)

注5：本報告は、日本建築学会北海道支部第85回研究発表会において発表した「子どもたちと一緒にまちの宝を探索ワークショップ 北海道まちづくり協議会コミュニティ再生研究グループ活動報告」をもとに、加筆・詳説したものである

注6：北海道まちづくり協議会のホームページ (URL <http://kitamachi.org/>) より転載

注7：参加小学生の顔が判別できないよう画像処理を施した

注8：参加小学生の顔が判別できないよう画像処理を施した

注9：成果品の画像は地域の特定につながる固有名詞などを画像処理により消去した

謝辞

本活動にご理解ご協力いただいた小学校校長はじめ関係者の皆様、報告執筆にご快諾いただいた北海道まちづくり協議会様、同コミュニティ再生研究グループの皆様、WSに精力的に協力下さった北海学園大学工学部建築学科岡本ゼミ4年生(当時)にこの場を借りて御礼申し上げます。

【参考文献】

- 1) 青森県県土整備部都市計画課：あおもりまち育てブック，2008。
- 2) 札幌市 市民まちづくり局市民自治推進室 市民自治推進課：まちづくり手引書 みんなでまちづくり～ステキなさっぽろっこになろう～，2009。
- 3) 札幌市市民まちづくり局都市計画部都市計画課：まち本～まちづくりに役立つ都市計画の本～，2005(初版) 2008(四版)。
- 4) 札幌市市民まちづくり局都市計画部都市計画課：ミニまち～さっぽろのまちがわかる小さな本～，2007(初版) 2010(三版)。
- 5) 千葉市都市局都市部都市計画課：マメまちちば ちば市のまちづくりのルールがわかる豆本，2008。
- 6) 川崎市まちづくり局：まちづくり副読本 まちは友だち！かわさきまちづくり，2000(初版) 2007(二版)。
- 7) 兵庫県県土整備部県土企画局：ひょうごこどもまちづくり読本 わたしたちのまち～みんなでまちづくり～，2004。
- 8) 国土交通省 都市・地域整備局 景観室：発見！わたしたちのまち大好きなまち[学校における景観まちづくり学習の手引き]，2008。
- 9) 国土交通省 都市・地域整備局 景観室：小学校における景観まちづくり学習実践事例集，2008。
- 10) 国土交通省 都市・地域整備局 景観室：景観まちづくり学習モデルプログラム，2008。
- 11) 北海道建設部都市計画課：景観学習の手引き～テーマは子どもたちがみつける！～，2006。
- 12) 北海道建設部都市計画課：わたしたちの暮らしと景観から暮らしの中の景観はみんなの宝もの～，2006。